

たため、桓武天皇は仏教勢力などを政治から遠ざけ、天皇中心の国をつくるため、長岡京に遷都した。

しかし、災害などの頻発が、桓武天皇の弟（早良親王）^{さわらしんのう}の呪いであるなどとして天皇を悩ませたり、近くを流れる桂川が洪水を起こしたことなどが原因で、わずか10年で平安京に都を移すことになった。



写真 1-2 平安京模型 提供 京都市歴史資料館

(2) 平安時代

京都の都としての歴史は、延暦13年（794）、桓武天皇が平安京に遷都の詔を発したことから始まる。中国から輸入された風水説に基づく「四神相応」（※1）の条件に適していたため、京都の地が平安京の建設地に選定されたと考えられている。

平安京の内部の構成を見ると、朱雀大路を中心として、東西1,508丈（約4.5km）、南北1,753丈（約5.2km）、「左京」と「右京」の左右対称の二つの京からなる都市として計画され、その造営は、これまでの都づくりを集大成したもので、遷都の前年から延暦24年（805）まで続いた。

左右対称の都市構造をもつ平安京は、中心軸に朱雀大路が南北にとおり、その南端が都の正門である羅城門、北端が内裏や大極殿などからなる平安宮に接していた。

そして、条坊制による碁盤目状の道路が計画的に配置され、以来、現在に至るまで、格子状の道路配置が京都の都市構造の骨格をなしてきた。

平安京内の町割の単位は40丈（約120m）四方で、さらに一町の土地を四行八門に分割された四行八門式の敷地を戸主と呼び、これが1家族の宅地の基準であった。各町のまわりには築地・板塀・柵などが建てられ、条坊の周囲の築地は厳重に固められたうえ、朱雀大路に面する左右京の坊門は、兵士が警固した。しかし、全京城の長大な条坊の修理維持は至難であったため、次第に廃亡し、京の住人の動きは自由になっていく。

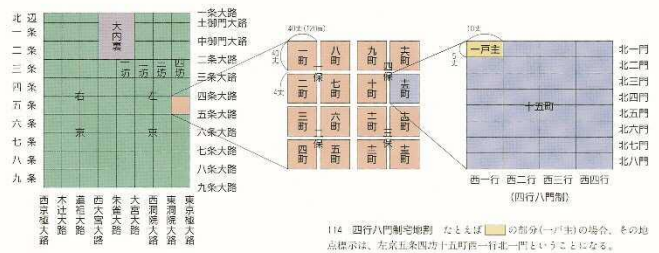


図 1-4 四行八門制宅地割 出典 「平安遷都1200年記念 甦る平安京」

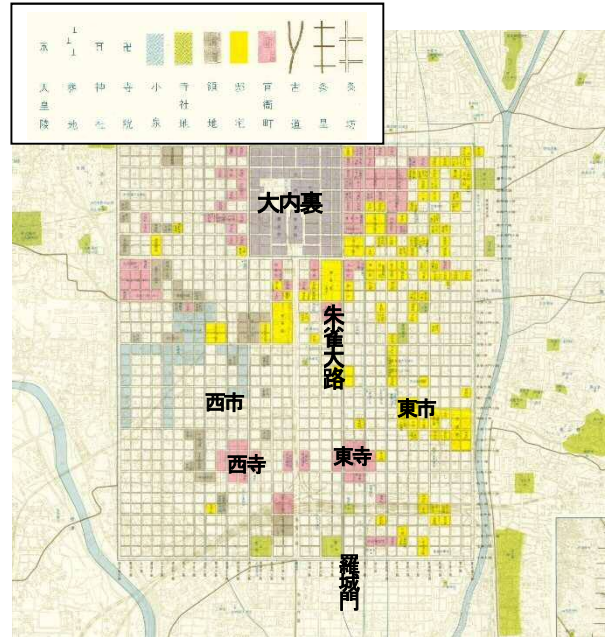


図 1-5 平安時代・院政以前の様子 出典「京都の歴史1」

平安京の造成の際、川は南北の道路に沿わせて配し、それが東西路と交差するところには橋が架けられた。特に堀川は、造都時はもとより、諸物資を運ぶ京中運河の機能を果たすべく、整備が早くから行なわれた。

一方、平安京の外郭としては、異民族の進入などの脅威がないという特性から、わずかに九条大路の南辺に羅城とよぶ築地が造られ、南面中央の羅城門があるだけであった。

平安京が成立すると、すべての主要な道は平安京に求心することになり、その中でも平安京を指す古代最上位の幹線道は、九州大宰府からやってくる山陽道であった。その他、貴船神社・鞍馬寺への参詣道として利用された鞍馬街道や、鯖街道として知られ、京都の北部山間を経て若狭にいく若狭街道は平安期から利用され、西日本と平安京羅城門を結ぶ西国街道も、起源は平安京成立のころである。

水運の要所としては、大堰川（桂川）の梅津、ことに木津川・宇治川・桂川の三川が合流する淀・山崎が、水陸運輸の結節点としてもっとも重要な機能を果たし、平安京の外港としての役割を担っていた。